

東京女子医科大学々会第64回例会

日 時 昭和29年1月29日午後2時

場 所 東京女子医大臨床講堂

1. 非定型的な筋萎縮症例

(内科) 荒木律子 有村久代

非定型的な筋萎縮症を2例経験し共に剖検し得たのでここに報告する。

第一例 61才 主婦 昭和26年8月頃から左踰趾より漸次上向し1年2カ月にして左下肢に至る運動障碍及筋萎縮を主訴として27年11月当内科に入院す。当時左下肢は筋萎縮著明で殆んど運動不可能、反射も微弱であり、右下肢は筋萎縮軽度、腱反射正常、左右上肢では握球及小指球の筋萎縮軽度に認められ、腱反射正常、腰部に神経痛用疼痛を訴えたが他覚的には知覚障碍は認められない。入院後1カ月位で舌筋萎縮及両下肢に線維性攣縮が認められ、両上肢の腱反射漸次充進を来し、その後上下肢の筋萎縮運動障碍は増強し、下肢は弛緩性麻痺の状態を呈し、入院後8カ月頃から球麻痺症状著明となり死亡す(全経過2年1カ月)筋萎縮性側索硬化症として病理解剖に付し、剖検により脊髓錐体路及前角に病変を認めた。

第二例 45才 主婦 食欲不振、全身倦怠、肩凝をもつて発病3カ月後頭部を垂直に維持する事が困難になり、6カ月後右下肢の歩行障碍が起り、肩胛部の筋萎縮を認めた。其の後筋萎縮、運動障碍が漸次進行し、7カ月後には右上肢左下肢、8カ月目には左上肢、11カ月目には手指に及び、音声微弱となる。28年9月本院入院、当時舌筋萎縮あり、頸部の諸筋肩胛部及上腕の筋萎縮及運動障碍著明で、歩行は勿論独力での起坐も不能となり上肢では前腕を僅かに屈曲し得る程度、起坐させると頭部は前屈し、肩胛骨翼状化し、前腕、下肢にも筋萎縮及線維性攣縮あり、更に肋間筋・胸筋の萎縮も著明。手は鷲手を呈し、すべての腱反射及骨膜反射は減弱乃至消失。知覚障碍なし。電気変性反応は不完全変性反応を示し、筋電図は前脛骨筋等にSynchronizationを認めた。以上の諸症状により脊髓性進行性筋萎縮症のVulpian-Bernhard型と診断す。其後球麻痺症状著明となり肺炎を併発し発病以来12カ月で死亡す。剖検により主として脊髓前角に病変を確認する事を得た。

2. 胎性的腎臓混合腫瘍の一例

(小児科) 藤本茂子 小山暁子

3才5カ月の女兒にして血尿と腹部腫瘍を主訴として来院。左下腹部に境界明瞭なる腫瘍を触れ、諸検査より左腎腫瘍と診断、外科摘出手術を行い、940gの大なる腫瘍を摘出、摘出標本より胎生的腎臓混合腫瘍と診断せり。

腫瘍摘出後一時小康を得たが3カ月を経て肝に腫瘍を触れる様になり全身羸瘦著明にて遂に死亡した。

3. ジニトロサリチル酸を用いる糖定量法の検討

(東京女子医大) 渡辺翠子、長瀬明美

荒木仁子、佐久間もと(学生)

(演) 松村義寛(生化学)

還元糖量を測定するための発色試薬としてジニトロサリチル酸を用いる Sumner 氏法について、反応条件、特異性を検討し、生化学的材料に対して応用するの可否を定めるべく実験を行つた。その結果、添加糖の回収が不良であり、臨床化学的に応用するのは避くべきであるが、酵素化学的の実験等妨害物質の僅微の場合には応用し得るものである事を示した。

4. 臨床病理懇談会(CPC)

45才 家婦

家族歴 特記すべきものはない。

既往歴 幼少時:健康で口炎の既往はない。

14才:肺炎で6カ月休学、引続き気管支喘息様症状起り、2カ月で全治。

16才:特別な原因なく、顔面に浮腫、歩行時動悸あり。心腎疾患と診定されたが、2~3日の静養で治癒。熱はなかつた。

22才:急性虫垂炎様症状、保存療法で治癒。

23才:結婚、34才までに、妊娠5回(人工並自然流産各1回)毎回、出血多量で1時的な貧血を来すが、その他は順調

昭和13年(32才)から毎秋、気管支喘息発作ありEphedrinを連用しつつ労働をつづけたが、大した苦痛なし。